金倉圓照博士の遺稿から

A Left Manuscript of late Professor em. Dr.Yenshô KANAKURA

木　村　俊　彦
Toshihiko KIMURA

〈要旨〉

2007年と2008年の資料紹介では、金倉圓照・東北大学文学部教授の最終年度の印度哲学史特殊講義を聴講された直弟子の一人・神舘義朗先生のノートを頂戴して掲載した。先生は筆者のパーリ語講師であられたが、最後は滋賀医科大学の哲学教授として定年まで勤められた。今般は同じく金倉圓照博士の直弟子である村上真完・東北大学名誉教授から、金倉博士の未公刊の著書『印度中世精神史』下に相当する原稿のコピーと演習の為に用意された『ニヤーヤバーシュヤ』（『論理学疏』）と『サルヴァダルシャナサングラハ』（『一切哲学綱要』）の全訳ノートのコピーなどを寄託された。

ここでは後者の第二章（仏教章）の初めの部分を紹介したい。合わせて前後に金倉圓照博士の履歴と業績を紹介する。博士は鹿児島県のお寺の出で、1896年に生まれ、東京帝国大学印度哲学科を卒業してドイツなどに三年間留学し、新設の東北帝国大学印度学仏教史講座の助教授、次いで主任教授を勤められた。その後、『印度中世精神史』上巻によって日本学士院賞を受賞され、続いて同会員、昭和天皇の侍講も勤められた。新設の宮城教育大学長を三年間勤められたのは70歳からである。1987年に満90歳で東京で亡くなられ、出身のお寺に葬られた。本書の仏教章は仏教哲学四派の梗概であるが、最初にダルマキールティの仏教論理学の延引があり、14世紀後半という、仏教がインド本国で滅亡してからの南インドのマーダヴァの著書にしては、筆者の専門分野が最初に登場して実に興味深いものがある。

〈キーワード〉金倉圓照、『印度中世精神史』下、サルヴァダルシャナサングラハ、ダルマキールティ

私は2006年度と2007年度発行の本誌の「資料紹介」に「『プラサンナパダー』金倉圓照訳稿――神舘義朗氏ノートから――」と同「(承前)」を公表した。今般、私は直弟子の村上真完・東北大学名誉教授から金倉圓照博士の未刊の原稿コピー約640枚とインド哲学史演習用の和訳ノート9冊分のコピー等を寄託されたので、その一斑を報告する。

金倉圓照（かなくらえんしょう、1896-1987）博士は鹿児島県の旧制第七高等学校、東京帝国大学文学部を経て大正9年（1920）に大学院に進まれ、当時印度哲学講座の常勤講師であった宇井伯壽博士に就学された。大正12年、東北帝国大学法文学部開設と共に、宇井博士は印度学仏教史講座の教授、金倉博士も同時に助教授になる。昭和6年、東大教授に転じた宇井博士に金倉教授は博士論文を提出し、それは翌年の『吠檀多哲学の研究』（岩波書店）になった。以後、

印度学仏教史講座の主任教授、学生部長、評議員、文学部長、日本学術会議会員を歴任し、その間、昭和24年の『印度中世精神史』上（岩波書店）によって昭和30年に日本学士院賞を受賞された。同会員になり、昭和天皇にも御進講された。この書は昭和37年の「中」に続き、原稿のまま没後に残った「下」が遺稿コピーとして孫弟子の私の手に渡ったのである。

その他に博士編集のサンスクリット資料があり、『東北大学文学部研究年報』第７号掲載の訳註「サーンクヤ・タットヴァ・カウムディー」で省かれた校訂原文のタイプ印刷だったので、仰天した次第である。訳註の序文５頁に、宇井博士がドイツでガルベ教授から託された写本を基に、博士の慫慂で数種の刊本と校合したとあるもので、資料は序文とピタリ一致する。その註記も途中までタイプライターで打たれ、その後は筆記体で続けられている。

続いて和訳ノートのコピーが９冊分あり、演習用と先輩達に伺っている『ニヤーヤバーシュヤ』のノート５冊分と『サルヴァダルシャナサングラハ』４冊分及び各註記（左側頁）であるが、サンスクリット原語は途中までデーヴァナーガリー字体で丁寧に書かれ（これにも仰天）、筆記体と共に美しい。前者は「昭和13年１月３日譯了擱筆」と註記あり、早くに終了されている。後者は演習テキストだったと先輩方に伺っている。こちらは全16章のうち第15章（Pātañjala＝ヨーガ派）の１／３で終っている。「昭35.１.２」と註記あり、退官の正月で終了している。いずれも正月で終了になり、博士にとって正月は和訳の書き入れ時だったらしい。

主稿の『印度中世精神史』下の方は400字詰め原稿用紙640枚分があり、「上」と「中」の分量に一致する。博士は原題に「中（続）」と書かれている。「部派仏教の哲学」を補された後で、改めて「下」を書かれる心算だったらしい。「政治論（アルタシャーストラ）」が「付録」になっている。村上教授の手を経たコピーに表紙と目次の自筆原稿がパラリと落ちてきた。これは教授宛のサーヴィスであった。

原稿用紙は喜寿記念のパーティーで引き物にされた『シャンカラの哲学』上にサインされた自筆署名と同じ筆跡である（本学図書館に寄贈した）。この二枚の原稿は色紙に手張りした。また途中に、コピーの上から朱と青の鉛筆で指示された線の有るものがあり、消しゴムで端を消せたから、上塗りされた修正の赤鉛筆である。これは歴史的仮名遣いを現代のものに変更された形跡であるが、途中ですべて抹消されている。つまり村上本コピーには著者の検討が加わっている。後で判明したことであるが、金倉博士は直接村上教授のためにコピーして贈与したのである。

字体は徹底して旧字体と歴史的仮名遣いである。最初はさすがにコピーの上から現代形式に直す努力をされた形跡があるが、途中で諦らめてすべて赤鉛筆で消されている。出版は厳格にこの金倉スタイルを守らなければならないが、守らない安直な復刻商業出版が続いた。その他、各頁に書き込み、訂正、削除の手が加えられ、これを博士は「雌黄を加える」と称されるのであるが、これには改めて浄書が必要な上、現代ではデジタル化を要求される。かくて永遠の未定稿が孫弟子の私の手に渡ったのである。

博士は昭和35年３月に退官した後は東京に移られたが、昭和41年から３年間、新設の宮城教育大学の初代学長を勤められた。また著書の序文で、退官後の資料の不便さを嘆いておられる。この未定稿の資料には古いものが多い。従って原文は「中」の作成と同時期だったと私は推察

している。内容はアビダルマと部派仏教の考察が半分を占めるが、第六章はその中で、経部（Sautrāntikāḥ）を扱っており、私はダルマキールティ研究の上で裨益される所が多い。特に『ニヤーヤビンドゥ』関係のシチェルバトスコイ出版の資料から、ジャイナ教徒の複註者がダルマキールティを経部と認定したことをF.I.シチェルバトスコイが最初のロシア語版研究書で報告した（1909）。そのドイツ語訳（1924）から金倉博士は遺稿で指摘されている。

シチェルバトスコイがウィーン大学のG.ビューラー教授に就学して、ダルマキールティ関係の資料を取得したことは、彼の研究を方向付けた。（この間の事情はあまり知られていない。）その後のウィーン学派、つまりE.フラウワルナー教授の学統は学風の違いからシチェルバトスコイの業績を黙殺するのであるが、ウィーン大学との奇縁をウィーン学派は等閑視している。ダルマキールティ最初期の『ニヤーヤビンドゥ』系統の資料はダルマキールティ理解に重要であるが、この間の事情を私は先の東京大学での日本印度学仏教学会で「経部とダルマキールティ―金倉圓照博士の遺稿に拠りつつ―」として発表した。

金倉博士は鹿児島県坊津の寺に生まれ（明治29年＝1896）、鹿児島市の第七高等学校を経て、大正９年（1920）に東京帝国大学の印度哲学講座を卒業後、大学院や副手を経て、新設の東北帝国大学法文学部の助教授に就任された（大正12年＝1923）。主任教授の宇井伯壽博士は昭和５年に東京帝国大学教授に転任したが、その前年には金倉博士は仏教史講座の教授となられているので、ここに印度学二講座が成立している。助教授になった直後から三年間、ボン大学のヤコービ教授に就学された。帰国後、宇井教授に博士論文を提出し、それは翌年に岩波書店から『吠檀多哲學の研究』として出版された。

以後は周知の歩みを辿られたが、概要は『中外日報』の平成27年11月13日号の小稿を参照されたい。業績は『金倉圓照博士古稀記念論集』（昭和41年、平楽寺書店）に、それまでの履歴と共に掲載されているが、古稀以降は欠けている。しかるに今回の資料集に示寂前までの履歴と業績が詳しく付加されていたが、私の発表した「『プラサンナパダー』金倉圓照訳稿――神舘義朗氏ノートから――」（本誌44号, 2007年と「同・承前」（本誌45号, 2008年）も加えるべきである。最終年度である昭和34年度の印度哲学史特殊講義を故・神舘義朗氏がノートされ、私が頂戴したものを印刷に付したものである。

これは大乗仏教哲学者・ナーガールジュナ（龍樹）の『中論偈』を註解したチャンドラキールティの註釈の研究で最後のことであるが、早くにウパニシャッドやヴェーダーンタ派のシャンカラの研究から始まって、その後の原始仏教とジャイナ教の研究は岩波書店から『印度古代精神史』を昭和14年に出版され、『印度精神文化の研究――特にヂャイナを中心として――』は培風館から昭和19年に出されている。博士のいわゆるオールマイティーぶりは他に類を見ないが、私の三年次には博士は既に退官されていた。

没年は昭和62年（1987年）１月、満90歳で亡くなられた。『印度學佛教學研究』35巻２号に平川彰・日本印度学仏教学会理事長の正確かつ懇切な訃報が載った。故郷の鹿児島県坊津の出身のお寺に葬られた（山折哲雄・元東北大学助教授）。その二年前に東北大学で、東北印度学宗教学会の公開講演をされている。題目は「印度と仏教の切点――仏陀の生涯と思想――」となっているが、記録が無く、筆者撮影の貴重な写真のみ残っている。

遺稿のうち、『印度中世精神史』下の方は、前年度の日本インド学仏教学会大会（於東京大学）で「経部とダルマキールティ――金倉圓照博士の遺稿に拠りつつ――」として援用したので、ここでは14世紀前半のヴェーダーンティスト·マーダヴァの『サルヴァダルシャナサングラハ』（『一切哲学綱要』）のうち、仏教説の紹介である第二章の金倉博士訳を少し紹介したい。この書は金倉『印度哲學史要』（弘文堂書房、昭和23年）の第20章で簡単に述べられている。先輩方によれば、定年退官の年までの印度哲学史演習の題目であって、ノートには昭和29年４月からと昭和35年１月までの日付とが書かれている。63歳の３月で定年退官になり、和訳は全16章のうち第15章（ヨーガ派章）の１／３で終っている。サンスクリットの底本は書いてないが、多分下記のテキストである。原語挿入と左頁の註記は割愛するが、訳文は原文の侭である。但し習慣となっている専門用語が一般に難解過ぎる場合には、丸括弧で一度言い添えることがある。原典は、

The Sarvadarśanasaṅgraha of Mādhavācārya, edited by V.S.Abhyankar,
Government Oriental Series, No.1, Poona, 1924.

但し筆者の用いた原書は、The Sarvadarśanasaṇgraha of Mādhavācārya, Vidyābhavan Sanskrit Series 113, Vārāṇasī 1964である。

「　　佛　教

ここに佛教徒によりて云はる。〔Cārvākaニヨリテ〕“不相離（論理的結合）は認識され難し”と云はれたるは正しからず。同一性と発生性とによりて、不相離は容易に認識せらるるが故に。即ち次の如く言はる。

〔遍充（包含）は〕果と因との関係により、或いは決定する自性により、不相離（なる論理関係）の決定あり。〔同品（同種）に於ては〕見ることのみにより、〔異品（異種）に於ては〕見ざることのみよりして〔遍充（論理）は〕決定せられず（Dharmakīrti, Pramāṇavārttika, Ⅰ）。

‘随伴（推移）と非随伴（背離）とが不相離を決定す’といふ〔正理学派の〕主張に於ては、所立と能立との決定は確定されがたし。過去・未来・現在に於て知覚されざる事物に於て、不決定の疑ひを除きえざればなり。

〔問〕汝の斯かる種類の論拠に立つ見解に於ても不決定の疑ひは除かれ難し――

といはば、

〔答〕かくいふべからず。‘原因なくしても結果は生ずべし’とのかかる種類の疑ひは、矛盾によって限界を與へることにより退けらるればなり。何となれば、それを疑ふも、矛盾の発現せざるが如き疑問のみがなさるべきが故に。故に‘疑ひは矛盾に於て限界をもつ’といはる（Udayana, Nyāyakysumāñjali, Ⅲ）。故にそれの発生の確定によって、不相離が確定せらる。而してそれの発生の確定は、果と因との現量得と現量不得とによる五要因に関係す。即ち〔果は〕果が発生する以前には認識せられず、因が認識せられて始めて認識せらる。果が認識せられたる

後には、因は認識せられざるが故に認識せられずといふ五つの要因の集合によって、煙と火の因果関係が決定せらる。

同様に、同一性の決定によって因果関係が決定せらる。もしśiṃśapā樹が木たることを超越せば、そは自性を棄てさらむといふ反駁が生ずればなり。これに反し、かかる反駁が生ぜざらんには、度々付随が認めらるるとも、誰が不一致の疑ひを除きうるか。śiṃśapā樹と木の同一は‘このśiṃśapā樹は木なり’との同格語定言の力によって生ずる。何となれば絶対非差別なる時は、かかることは生ぜざればなり。同義語によっては同時に用いることは不適当なればなり。〔木ハ木ナリ、ハ意味ヲナサズ。〕又絶対差別あるものに於ても用いられず。牛と馬についてもこれは認められざればなり。故に結果（因）と自性（因）とが原因と自体を比量せしむることは明白なり。

もし人ありて、比量（論理）の権威に同意せざらんに、彼に対していふべし。單に‘比量は量（認識根拠）に非ず’といふ限りに於て、これに何らの証明力なしと申立つる或は〔多少ありと〕申立つるや。第一の場合は正しからず。頭のない言葉の申立てに於て所立（所証）は成立せざればなり〔むきだしの叙述は事柄を証明せず〕。‘單独の主張は主張を證明せず’といふ諺あればなり。後の場合も亦然らず。汝は‘比量は量に非ず’と言ふことにより、言葉の量たることを許さずして、然も自他の論に於て量と認められたる言葉の申立てをなすは、恰かも‘我が母は石女（うまずめ）なり’といふが如く矛盾におちいるべし。

さらに、量と似量（非量）の決定（判断）は、それが同種であることによって生ずると汝がいふ時に、同一性比量を自家の薬籠とせり。又他人の反対意見は言葉の相によりて〔知らる〕と汝がいふ時、結果を相とする（證因とする）比量が〔汝によりて採用せられたり〕。又知覚せられざることによって対象〔の存在〕を否定することによりて、知覚せられざることを相とする比量を〔汝は採用せり〕。

また世尊如来によりても次の如くいはる。

他の量（認識根拠）と共通に存立することにより、他人の思慮を会得することにより、

又或るものを否定することにより、他の量は確實にあり、と。

而してこれについて学者は多々辯じたり。故に本の拡大をおそれてこれを略す。

又佛教徒は四種の思想によって最高の人間の目的を説く。彼らは中観・瑜伽行・經量・毘婆沙といふ名称によりて世に知られ、順次に一切空・外界空・外界比量得（推理知）・外界現量得（知覚知）といふ説に立つ。世尊佛陀は唯一人の師なれども、教へらるべき知の差別によって四種あり。たとへば‘太陽沈めり’といふ時に、不義密通者、盗賊、学問の深き者等が自分の好む習慣によりて密會、盗み、善行の時を自覚するが如し。①一切は刹那滅なりとの刹那説、②一切は苦なりとの苦説、③一切は自相によるとの自相説、④一切は空なりとの空説、かかる思想が示さるるを見るべし。（紹介者は、①部派仏教の経部、②同毘婆沙派〔一切有部〕、③大乗仏教の唯識派、④同空観派と見る。）

このうち、青いものその他の刹那性は有性（存在性）によりて比量（推論）されねばならぬ。〔即ち〕すべて有は刹那性なり（大前提）。雲の集まりの如し。而してこれらの物は存在してあり（小前提）。（故にこれらの物は刹那性なり。）而してこれは不成因に非ず。有用なる行為を起さしめる

ことを相とする有性に、青い物等の刹那性が現量得の故に。〔又〕能遍者（包含者）を遮遣（否定）することによりて所遍者（被包含者）も遮遣せらるるとの論理に従ひ、能遍者（非刹那のもの）が継続的･非継続的であれ遮遣せらるる時に、非刹那性の故に有性も遮遣せらるるが故に、〔正因として論者に於て〕成立すればなり。而して有用な行為を起さしめることは継続的にか非継続的（同時）にか（有性に）含まれている。継続的と非継続的以外の行相はあり得ない。

なぜなら相互に矛盾する時、他の行相は存在し能はず。矛盾するものが
一つなることはなし。ただそれをいふことすら矛盾すればなり（Nyāyakusumāñjali, Ⅲ）。

との理に従ひ、その場合は不合理が甚だしいからである。而してこの永遠なる継続的・非継続的なものは現に有るものから排除せられる。有用なる行為を排除するから、ただ刹那性の主張は有性（なる證因）が確立することは明らかなり。

〔問〕非刹那のものが有用なる行為を起さしむることは何故ありえないか。

〔答〕そは正しからず。妄分別を伴なふ故に。即ち、現在有用な作用を爲す時、過去と未来の有用な作用は現在の物に有るか無いか。もし有りとせば、その（過去・未来の）二者を否定しえざる過失におちいる。能力は否定しえざるが故に。即ち作用能力はその時それをまさに爲す。例えば原因の集合が自己の結果を爲す如し。而して作用能力はかかる状態なりとの結論が比量せらるればなり。

彼がそれを爲さざる時、それはそれに無能力なり。例へば石片が芽に爲さざる如し。又彼が現在の有用なる行爲をなす時は、過去と未来の有用な行為を爲さず。そは矛盾なりせば。（以下略）」

仏教章の初めは刹那滅の証明の議論から始まり、ダルマキールティが発明した論理学を取り扱っているので、筆者のテーマになっている。主著『プラマーナヴァールッティカ』第一章の論理学と『ヴァーダニヤーヤ』の弁証法を引き、特に興味深かった。刹那滅の証明の大前提は「実在するものは刹那滅である、」小前提は「言葉は発声され、実在している、」帰結は「故に言葉は刹那滅である」として、聖語（ヴェーダ聖典）の永遠性を主張する婆羅門教系に対峙する論理になっている。ヴェーダーンタ学派のほか祭祀学派や言語文法学派にも向けられている。大前提が存在論的であるが、「永遠のものは有用な作用がなく、「実在」の定義と矛盾する」という帰謬検証がダルマキールティに用意されている。上に紹介した引用部分の分量は仏教章の初め１／５強に過ぎない。紙幅の都合で後は省略する。

後半になってから、経部の議論の紹介が改めてあり、ダルマキールティやジュニャーナシュリーミトラの刹那滅の証明の紹介の後になっている。そして金倉博士は『馬鳴の研究』（平楽寺書店、1966年）の第六章「外教の伝える経部説」の三「サルヴァダルシャナサングラハ」でそれを11頁にわたって再録されている。経部の議論の相手は大乗仏教の瑜伽行唯識派である。

『サルヴァダルシャナサングラハ』全16章の構成は次のようになっている。表題は判りやすくするために原題を離れる場合もある。(1) 唯物論者（Cārvāka）、(2) 仏教（Bauddha）、(3) ジャイナ教（Ārhata）、(4) 限定的一元論（Rāmānuja派）、(5) 二元論（Madhvaのヴィシュヌ派）、(6) パーシュパタ派（Nakulīśaのシヴァ派）、(7) シヴァ派（śaiva）、(8) カシュミールのシヴァ派（再認識派）、

(9) 生前解脱派 (Raseśvara派)、(10) ヴァイシェーシカ勝論学派、(11) ニヤーヤ論理学派、(12) ミーマーンサー派 (婆羅門教祭祀学派)、(13) 文法学派 (パーニニ学派)、(14) サーンクヤ派 (数論)、(15) ヨーガ派 (Pātañjala派)、(16) 一元論 (シャンカラ派) で終る。マーダヴァにとっては初めほど異端派で、最後にヴェーダーンタ派の哲学者シャンカラの紹介がくるが、これは弟サーヤナの筆とされる。著者には別に『十五章篇』(Pañcadaśī) というシャンカラ説がある (金倉博士)。

金倉教授の演習はこの各派集成の難解な書の解読を目指したもので、惜しくも第15章の1／3で定年退官となって中断している。他に翻訳としてはニヤーヤ学派の註釈者ヴァーツスヤーヤナの『ニヤーヤバーシュヤ』訳があり、これも筆者の手元にコピーがある。刊行されたものとしては上記シャンカラの『ブラフマ〔ヴェーダーンタ〕スートラ疏』が『シャンカラの哲学』上 (昭和55年)・下 (昭和59年) として春秋社から出版されたほか、ヴァーチャスパティミシュラの数論偈註を「サーンクヤ・タットヴァ・カウムディー」として『東北大學文學部研究年報』第七号 (1956年) に和訳のみ掲載され、割愛された博士の校訂原文は筆者の手元にある。そのほか後期ニヤーヤ学派のケーシャヴァミシュラの『タルカバーシャー』の和訳を同誌第一号に掲載された (1951年) のは文学部長の時であった。

早くに初期の大正11年から12年にかけて、高楠順次郎監修の『ウパニシャッド全集』に『アイタレーヤ・ウパニシャッド』など五点を訳され、直後に東京から仙台に赴任された。春秋社から『インド哲学仏教学研究』〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕を昭和48年に出され、これは一部の復刻再録である。そのほか『印度哲學史要』(弘文堂、昭和23年)、『印度哲學の根本問題』、(光の書房、昭和23年)、『印度哲學の自我思想』(大蔵出版、昭和24年)、『馬鳴の研究』(平楽寺書店、昭和41年)、『インドの自然哲学』(平楽寺書店、1971) などがあり、我々を裨益する所が大である。故・宇野淳・広島大学名誉教授はニヤーヤ、ヴェーダーンタ、ジャイナの三学派に通じておられたが、「ジャイナ教については金倉先生の『印度精神文化の研究――特にヂャイナを中心として――』(岩波書店、昭和19年) から出発した」と言っておられた。京都学派にも影響を与えたのである。

〈付記〉 年度が元号と西暦になっているのは当該文献の表記に従ったものである。『印度中世精神史』下については今年度の日本印度学仏教学会東京大学大会で「経部とダルマキールティ――金倉圓照博士の遺稿に拠りつつ―」として援用・発表し、『印度學佛教學研究』第65巻第1号に掲載された。